

アリ・マルコポロス展

ファーガス・マカフリー東京

2019年1月12日-3月9日

ファーガス・マカフリー東京は、2019年1月12日から3月9日まで、アリ・マルコポロスの個展を開催致します。ファーガス・マカフリーにとって、マルコポロスの作品を紹介する最初の機会となります。本展では過去2年間で新たに制作された3点の映像作品を展示します。ファイン・アートとストリート・フォトグラフィの垣根を超える写真作品で世界的な人気を誇るマルコポロスですが、これらの映像作品を通じ、作家の新たな一面を垣間見ることができます。

展示のハイライトとなるのは、ブルックリン（ニューヨーク）のウォルト・ホイットマン団地近隣にある、フェンスの無い公共のバスケットボール・コート風景を収めた58分の映像作品「The Park（ザ・パーク）」(2017-18)です。最初の51分間はコートの片方から、残りの7分間はカメラが移動し反対側から撮影されます。「The Park」は、バスケットボール・コートが公共の場、社会生活の根源的な空間であることを明らかにしており、社交上の作法における人類学的な断面を映し出しています。時にプレイヤーは落ち着いていて親しみやすく、またある時には競争心が激しくなり試合は熱を帯びます。コート内におけるせめぎ合いと同時に、映像全編を通して地元の人たちがコートを通り過ぎることでコートの内と外との交流が生まれます。それは潮の満ち干きのように流れ、何気なく自然発生的なやり取りにみえます。この様にしてマルコポロスは、バスケットボール・コートを現代の田園的かつ夢のような風景画に変容させ、田舎的な静けさの中でコミュニティと家族性とともにごく普通の午後のように写し出しているのです。



当初サイレント・フィルムとして発表された「The Park」ですが、今回は世界的音楽家であるジェイソン・モランによる即興演奏のライブ収録をサウンド・トラックとして追加します。2017年同作品を観たモランは、この平凡な都会の様子を無音な眼差しで見つめる作品に対し、ピアノ演奏で応えたいという衝動にかられたと言います。ワシントンD.C.のジョン・F・ケネディ・センターで行われたセロニアス・モンク生誕100周年を記念する式典で、モランは「The Park」の一部（15分間）を上映し、その場でピアノの即興演奏を行いました。モンクは地元のコミュニティ・センターからピアノを持ち出し、バスケットボール・コートの横に配置して試合を観ながら演奏をしたことでも広く知られており、また自身の出身地であるハーレムの街で音楽について考えながら何時間もさまよっている姿も見かけられました。この瞑想的な行動はマルコポロスの映像作品と共鳴しており、それは作者のシグニチャーとも言える写真的親密性を動画へと変容させています。映像が進むにつれ、鑑賞者は簡略的なバスケット

ボールの試合へと引き込まれていきます。モランの演奏は、映像の中のいわば台本のない振り付けの視覚的リズムを自由に解釈し、マルコポロスがレンズを通して読み解いたコート内の活動に聴覚的要素を与えているのです。

「**Monogram Hunters (モノグラム・ハンターズ)**」(2018)が記録しているのは、ニューオリンズ（ルイジアナ州）を旅する中マルコポロスが遭遇した音楽と集合体との独特な出会いです。7区にあるバーでの集まりに招かれた作家は、マルディグラ・インディアンの「**トライブ（部族）**」のリハーサルの様子を収めています。上の世代のメンバーが新しい世代にダンスのルールを教え、トレーニングしています。決まった作法や身振りがあり、このリハーサルは参加者がマルディグラの際ライバルのトライブと競う準備のようなものです。唱えている歌は何世代にもさかのぼり、太鼓のリズムは密着しているこの少数の男たちを近隣にある数々のバーのさらに広い集合体とも団結させているのです。

夏の終わりにカナダのノバスコシア州に旅行した際撮影された「**Upper Big Tracadie (アッパー・ビッグ・トラカディー)**」(2018)。この旅でマルコポロスは、アメリカ独立戦争の最中に解放された黒人奴隷たちによって1783年に設立された小さな街を訪れました。縮小していく住民社会の中心部分に位置する教会は1822年に設立され、大部分をアフリカ系カナダ人が占める集会の場となっています。旅人と参加者の両方としてのマルコポロスの視線からこの小さな自治体で起こる日曜日の出来事を見ることにより、鑑賞者は社会への貢献について考えさせられると同時に、親密な距離からその貢献を体験させられるのです。

マルコポロスは自身の作品の柱を「**ノイズ、奮闘、反乱、混沌**」と定義しています。本展覧会で作家は、自身の写真制作における原理を落ち着き、気遣い、そして気品をめぐる映像へと転換させています。そこでは、ゆっくりとした流れとともに、時に中断や破裂が起こる現代社会における生活が捉えられているのです。



マルコポロスは、形式主義的視線を公的な集会の場、変容するバスケットボール・コート、公園、教会、コミュニティ・センターなどに向けるのですが、それらの「**ステージ**」では、予測不可能な日常の生活がただひたすら展開していくのです。

本展覧会は、正式には2018年12月20日に **sonorium (ソノリウム)** で実施した「**The Park**」の上映会で開始しており、映像に合わせてジェyson・モランがピアノの即興演奏を行いました。モランとの共演を記念しマルコポロスは、上記上映会の冊子、**ジーン (ZINE)**、そしてポスターを制作。2018年12月21日に代官山 蔦屋書店で開催した作家本人によるサイン会にて初披露しました。

アリ・マルコポロスについて

1957年アムステルダム生まれ。1979年に初めてニューヨークを訪れたマルコポロスはダウントウンのアートシーン、そして急成長を遂げていたヒップホップ・カルチャーに参加します。彼の写真は、重なりがありながらも異なった二つの世界を繋げる役割を担い、初期ヒップ・ホップの生身で直感的な技巧と、1980年代のダウントウン・アートの皮肉に満ち「イメージ」に浸された文化の両方を内包することにより特徴付けられるユニークな感性を生み出しました。アンディ・ウォーホルのスタジオでモノクロ写真の印刷業務を2年間行った後、マルコポロスは写真家アーヴィング・ペンのスタジオ・アシスタントとなりました。彼の作品は、ウォーホルの主題に対する非差別的なアプローチと、ペンの熟練された技術と形式的優雅さに重きを置く姿勢の両方に形作られています。

マルコポロスは自身の写真制作をニューヨークの街中で始めました。主題と深い繋がりを築き親密性を持つ彼のアプローチは、彼自身を撮影対象のコミュニティの中にすぐに溶け込ませました。1980年から生み出された写真の全容は作家自身の伝記的なラフスケッチとも言え、40年間以上にわたり生み出された彼の作品からは、撮影対象の人物の周りに存在する自身の親密な家族生活が垣間見られます。撮影されるのは、作家自身の言葉によると「アウトサイダー、スケーター、ラップの神、アスリート、子供、木々、グラフィティ、顔、揉め事、車」など。コンセプチュアル・アートとドキュメンタリー写真の豊かな歴史に導かれたマルコポロスのアプローチは自由で直感的です。撮影する人物たちのライフスタイルや行動からヒントを得ており、それによって感情に直接訴える力と形式的な厳格さの両方が作品に吹き込まれているのです。

マルコポロスはFOAM 写真美術館（オランダ・アムステルダム）、バークレー美術館（アメリカ・カリフォルニア）、MoMA PS1（アメリカ・ニューヨーク）、フランク・エルバズ・ギャラリー（フランス・パリ）、マルボロ・チェルシー（アメリカ・ニューヨーク）、アレジド・ギャラリー（アメリカ・ニューヨーク）など各地で個展を開催。2002年と2010年には「ホイットニー・バイアニュアル」へも出品しています。ホイットニー美術館（アメリカ・ニューヨーク）、サンフランシスコ近代美術館（アメリカ・カリフォルニア）、ニューオリンズ美術館（アメリカ・ルイジアナ）、デトロイト美術館（アメリカ・ミシガン）という名だたる美術館が写真作品を収蔵。出版も多数あり、『Epiphany: Gucci』（2016、IDEA）、『Not Yet』（2016、Rizzoli）、『Rome-Malibu』（2016、Roma）、『Out to Lunch』（2012、Roth）、『Fumes』（2015、Karma）、『Directory』（2011、Nieves）、『Out and About』（2005）、『Kids Born out of Fire』（2004）、『Pass the Mic: Beastie Boys 1991-1996』（2001）、『Transitions and Exits』（2000）にて作品を発表しています。

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など、戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマ

ー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。

日本の美術や文化と深く沿うため 2018 年 3 月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道に画廊を開設いたしました。2019 年はアリ・マクロポロスの個展をはじめ、パティ・スミス、ジャスパー・ジョーンズほか多様なプログラムを予定しています。

プレスのお問い合わせ

ファーガス・マカフリー東京

Tel : +81-(0)3-6447-2660

Email : tokyo@fergusmccaffrey.com

Map:

